



私の歩んだ道

伊藤 雅章*

はじめに

昨年10月で満66歳になりました。今回、「皮膚病診療」より「私の歩んだ道」という題で原稿を依頼されましたが、振り返ると、平凡な道で、公開するものでもない気がします。ただ、平凡でしたが、多くの幸運に恵まれ、着実に歩んで来たようにも思います。皮膚科の専門医や研究者を目指す若い人たちに少しでも参考になればよいかと思い、執筆しました。

I. 幼年期から大学入学まで

昭和24年10月2日、浜松市の生まれで、家は「うなぎ料理屋」を営んでいました。幼少時に私の第一の幸運がありました。歩行もままならないときに硬貨を飲み込み、祖父が急遽の処置で吐かせてくれ、九死に一生を得ました。間に合わなければ、私の人生のその後はありませんでした。4歳頃、両親の商売の都合で茨城県古河市に移り、「古河第一小学校」に通いましたが、同小学校は新村真人先生（東京慈恵会医科大学名誉教授）も通われたということを近年知りました。新村先生は古河の由緒ある家柄とお聞きしています。さて、私自身は幼児期から小学校まで喘息と中等症以上のアトピー性皮膚炎（AD）があり、体育は見学、ADでは、祖母が私を連れて東京まで聖路加病院皮膚科に通って、グリテールパスタに頼る日々でした。その後、喘息

には吸入薬、ADにはステロイド外用薬が登場して、医学・医療の発展の恩恵を受けたことは、第二の幸運であったと思います。中学からは、古河から東京に片道約1時間半の列車通学をして、都立高校に進学しました。「越境入学」でしたが、たまたま父の知り合いに古河から通勤している先生がおられ、お陰で東京の公立学校に通えることになりました。私の年代は「受験戦争」でしたが、かなりスムーズに進学して、成績も徐々に上昇して、医学部を受験できるまでになりました。第三の幸運でした。一浪で新潟大学医学部を受験しましたが、大学紛争で東京大学が入試を中止した年で、新潟大学は11倍を超える難関でした。自分では「無理だろう」と思いましたが、何とか100人のなかに入りました。当時の入試は「一発勝負」であったのが幸いしたと思います。第四の幸運でした。私立大学は理工学部を受験したので、受からなければ、医師にもなっていなかったでしょう。

II. 大学時代

大学紛争の影響で、入学は1カ月遅れ、その「休暇」を利用して自動車運転免許を取りました。医学進学課程（教養）では、入学後も紛争の煽りで、しばしば授業が休講になり、私はいわゆる「ノンポリ」で、仲間とビリヤードやボウリングに行って、かなりの腕前になりました。その頃、同級生とバドミントン同好会（2年後、部に昇格）を結成し、あまり勉強はせず、健康になった時

* Itoh, Masaaki (新潟大学名誉教授)

期でした。夏季休暇などで古河の実家に帰り、店のライトバンで集金や仕入れに行き、社会勉強もしました。これらの経験は、第五の幸運でした。

医学専門課程に進級すると、同級生は、皆、優秀で、また、医学の膨大さに圧倒され、私はただ黙々と授業を受けて、試験を受けていました。結果として、6年間、一度もWコン(再試験)を受けずに卒業できました。これは、第六の幸運です。ただ、当時のカリキュラムは、「講義」時間数が全国最多で、試験術があれば容易でした。親類縁者に医療関係者のいない私は、医療のどの分野に興味があるとか、医学で何かを目指すとか、あまり考えもなく、ただ、ADのため「手洗いのある外科系はダメだな」と思う程度でした。卒後に直接入局する時代で、小児科を考えていましたが、卒試の頃、ADが悪化して本学皮膚科に通院したところ、当時の猪股成美助教授に「ADが悪いのでは、まずは1年ほど皮膚科にいてはどうか」、さらに「そんな状態だと小児科は大変だよ」といわれ、ついには皮膚科に入局してしまいました。これは、幸運(第七)だったのでしょうか？

Ⅲ. 入局から教授就任まで

昭和50年当時の教室は、佐藤良夫教授のもと、教室員はわずか十数名で、臨床経験が少なく研究歴もない私でも、3年弱で「助手」に昇任しました。教室の研究としては、猪股先生の脂質研究が1つの柱で、また、諸橋正昭講師(故 富山医科薬科大学教授)と佐藤信輔助手(後に助教授)の皮膚電子顕微鏡がもう1つでした。私は電顕を習いましたが、当教室には透過型電顕(JEM-T8)があって、資料作成～電顕観察～写真現像・焼付けまですべて自前でできる環境でした。当時はガラスナイフでしたが、それでも数編の症例報告を発表できました。この環境は、第八の幸運でした。しかも、教室専従の今井隆技官が、もともと写真の専門家で、佐藤教授の前の田中宏教授時代から、臨床写真はもちろんのこと、光顕標本の作成や撮影、スライド作成など、卓



著者近影

越した技術で仕事をしていていました。電顕でもその知識や技術が有意義で、今井氏は私の教授晩年まで勤め、とてもありがたい人材でした。

さて、助手になる前の1年間、長岡赤十字病院に出向し、そこで知り合った家内と昭和53年9月に結婚したのが第九の(最良の)幸運でしたが、間もなく米国に留学する羽目になりました。ややネガティブないい方ですが、実は会津若松の病院に赴任した先輩に代わって私が助手になったものの、事情があって本学勢が引き上げ、先輩も教室に戻るようになりました。そこで、助手の席が必要となり、猪股先生から私に「米国の橋本健教授のところに留学してはどうか」と奨めがあり、またやや大きな進路変更になりました。中学・高校で英語の点数は良好でしたが、英会話は習わず、外国に興味はなかったので、晴天の霹靂でした。とうとう昭和54年1月に、生まれて初めて飛行機に乗って渡米しました。

橋本健先生は昭和6年新潟生まれ、当教室の橋本喬第二代教授(後に初代学長)のご長男で、猪股先生と同級(昭和30年卒)で、すでに皮膚電顕の世界的権威でした。先生は、米軍病院で研修し、京大解剖学で学位を取得し、渡米してBostonでLever先生と皮膚電顕の礎を築かれ、Tennessee州立大学教授を経て、Wright州立大学主任教授でした。電顕はある程度できた私なので、ボスと完全に日本語で通じ、さらに研究室には北海道大学から小林仁先生が先着してい

て、英会話の不安もなく、生活と研究を容易に開始できました。わずかの間でしたが、三原基之先生(鳥取大学名誉教授)ともご一緒しました。その後、北里大学から衛藤光先生、順天堂大学から岩原邦夫先生が来て、4人ともほぼ同じ年代、ほぼ新婚で、研究は朝から夜中まででしたが、とても楽しく、充実した米国留学になりました。私には、生涯の恩師と仲間を得て、これこそ第十の(最高の)幸運であったと思います。

研究では、渡米早々、橋本先生から「新潟は毛嚢脂腺だから、毛の電顕をやりなさい」、「毛の電顕はまだ十分ではないから、10年は飯が食える」といわれ、その気になったものの、初めは「毛組織の構造は複雑で、電顕観察は無理だ」と思いました。しかし、固定・包埋を工夫し、ダイヤモンドナイフを使い、道が開けました。毛の電顕を撮るだけでいくつも発見があり、数年でJIDをはじめ欧文誌に次々に発表できました。研究室に立ち寄られた小林寛先生(後に日本歯科大学新潟歯学部解剖学教授)の電顕技術のアドバイスも大変役立ちました。研究室では、電顕のみでなく、小林仁先生は生化学にも興味を持たれ、ケラチン抽出などもして、私は毛ケラチン抽出や電気泳動を教えてもらいました。また、衛藤先生は細胞培養の専門家で、研究室の最大の成果は、衛藤先生と小林仁先生が作製した抗ヒト表皮単クローン抗体(MoAb)でした。当時はリンパ球に対するMoAbが出たばかりで、皮膚科では世界的快挙でした。その後、私が帰国して、当教室の田沢敏男先生(当時、大学院生)に短期留学してもらい、衛藤先生にMoAb作製の指導を受けました。帰った田沢先生が当教室で作ったのが抗毛ケラチンMoAbで、毛研究の発展に繋がりました。まだケラチンの分類や分子構造も不明で、毛ケラチンは表皮ケラチンとは異なる一次元電気泳動パターンで、組成もシスチン/システインが多いという程度の知識でしたので、MoAbを作って何ができるか予測不能でした。実際、免疫組織化学染色でスクリーニングして、初めはヒト表皮に反応するものしかみつけれないでいました。あるとき、田沢

先生が蛍光顕微鏡を覗いて皮膚の深いところで何か光っているというので、私も覗いたところ、切片内の毛組織内に線状に光る部分があり、Henle層の外側で外毛根鞘とも異なる細胞層とみられ、外毛根鞘最内層細胞層(the innermost cell layer of the outer root sheath)と呼ぶことにしました。無論、それだけでは新しい「発見」にはならず、正常ヒト成長期毛組織の電顕を見直し、また、毛ケラチンでWestern blotをして、それを含めていくつかのMoAbについてJ Histochem CytochemやJIDに発表しました。これらの論文で、昭和62年、私が日本皮膚科学会皆見省吾記念賞を受賞しました。経緯を思えば、もともと橋本先生のご指導があり、衛藤先生、小林仁先生、さらに田沢先生という良き共同研究者に恵まれたお陰で、この受賞は第十一の(大変な)幸運でした。その後、勝海薫先生(当時、大学院生)が毛ケラチンポリペプチドを線維と基質の分画別に等電点・SDS-PAGEによる二次元電気泳動を完成させ、さらに毛研究が続きました。

少し戻りますが、留学中に苦労もありました。Wright州立大学(オハイオ州)生化学のOrganisciak先生がpallid mouseという淡い色の体毛と眼のマウスを持っていて、私は橋本先生からその毛と眼のメラノサイトを研究せよと言われました。電顕や酵素組織化学は容易でしたが、毛と眼の組織の酵素活性の測定では、1人で生化学教室に通いました。英会話は不得手で、とにかくコミュニケーションに苦労しました。昭和55年に橋本先生のWayne州立大学(ミシガン州)転任後もこの仕事は続き、私はDetroitからDaytonに出張して、Organisciak先生のお宅に泊めていただき研究室に通いました。すべて英語での生活で、何とか成果をあげました。帰国後、このJID論文で博士号を取得しました。苦労の機会は第十二の幸運でした。

一方、帰国すると、教室では本好捷宏先生(当時、大学院生。ポーラから出向)がウサギ耳介への化学物質塗布による面皰形成実験をしていました。本好先生が電顕を習ってくれ、良い研究になりました。また、私がWright州立大学のと

き、短期留学された種田明生先生(当時、順天堂大学講師)から教えていただいたDACM染色(組織のSH基・SS結合を描出)も大いに役立ちました。テトラデカン、DMSOとテストステロンの塗布で脂腺がそれぞれ異なるパターンで増大することを、三次元画像解析を加えてJIDに発表しました。三次元画像解析は光顕組織の完全な連続切片を作り(これは今井氏の協力によりました)、PCで立体像を構築しました。また、DACM染色は、丸山友裕先生(後に富山医科薬科大学助教授)のヒト口腔粘膜上皮の研究に役立ち、また、三次元画像解析は増子倫樹先生や池田和人先生(いずれも当時、大学院生)のヒト額部脂腺の年齢形態変化の研究へと繋がりました。教室では、猪股先生から山本綾子先生(後に助教授)がヒト皮脂の研究を受け継ぎ、生化学面での成果もあり、まさに「毛嚢脂腺」研究室の面目を保ちました。約3年の米国留学から帰国後、私と研究をしてくれる優秀な後輩が何人もいて、第十三の幸運でした。

家庭は、賃貸マンション住まいで、昭和57年に長男、58年に次男が誕生し、とてもうれしい第十四の幸運でした。ただ、息子たちがいて幸せでしたが、電顕や電気泳動などの昼夜を問わない研究と、日中は診療、それと学会で不在も多く、家内には計り知れない負担をかけました。そんななか、相当高価でしたが、PC(NEC8008)と自動タイプライター(Olivetti)、さらに日本語ワープロ(書院)も自前で購入して、論文や授業資料の作成の効率を高めました。すでにWright州立大学では、秘書が大きなPC(IBM)を使い、原稿や書類を作っていて驚いたのですが、帰国頃からPCが急速に進歩し、留学前とは格段の違いでした。原稿やスライド作りが楽になり、いくつもの論文を同時進行できました。新しいシステムをどんどん取り入れ、遅れをとらないことが大切です。この時代の流れも第十五の幸運でした。

以上のような経緯で、講師2年、助教授4年でしたが、私にはかなりの研究業績と勢いがあり、平成3年3月佐藤教授の定年後、教授選考の公募

で私以外に応募者がなく、教授会で信任投票され、7月に皮膚科教授に昇任しました。満41歳でした。少し遡りますが、帰国後、安田利顕先生や小川秀興先生が作られた皮膚科若手研究者のスカイクラブに入れていただきました。10名ほどの会でしたが、各研究分野で活躍する同年代の先生方と仲間になり、励みとなり、見識も深めました。これは私の学会活動にも好影響を与え、全国の多くの先生方と親交を深めました。これが第十六の幸運で、教授選に繋がったようにも思います。

IV. 主任教授として

教授就任後、「仕事」や「役目」は一変しました。急に「重荷を背負った」思いでした。「教授」は、すでに昔のように偉くなく、教室のいわば「責任者」です。給料も少しupしただけです。また、教授会は何十人もの異なる分野の教授からなる運営組織で、自らのテリトリーや権利を主張し、権限を争う場です。運営のさまざまなシステムを作り、個々の役目や責任を分担するわけです。教授職23年9カ月は責務に追われて目まぐるしく過ぎ、果たして「教授」昇任は幸運であったのか否か、わかりません。

教授としてもっともストレスフルで体力を使ったのは医学教育改革でした。平成6年11月「医学教育者のためのワークショップ(WS)」(5泊6日、富士教育研修所)に参加しました。内容は過密で疲労困憊でした。修了後、GIO・SBOs、方略や評価などが頭のなかを駆け巡り、洗脳されていました。教授会にはすでにWS経験者が3名いたものの、現実には旧態依然の教育が行われていました。間もなく荒川正昭医学部長(後に学長)から「自前で医学教育WSをやりましょう」といわれ、医学教育学会の堀原一先生、田中勸先生、橋本信也先生にタスクフォースをお願いし、平成9年に第1回新潟大学医学教育WS(1泊2日)を市内で開催しました。以後、第10回までコーディネーターを務めました。WSと並行し、平成12年から、グループ学習、PBLなどを導入した統合型科目を中心に、臨床実習も見学

型から診療参加型にした新カリキュラムを開始しました。とくに力を入れたのは臨床実習入門で、旧カリの学年にも平成10年から、医療面接、診察法、バイタルサイン、手術手洗いなどのユニットからなる2週間の臨床実習入門を作り、OSCEも実施しました。すべて手探りで、内科や外科の助教授を仲間に誘い(教授は役に立たず)、実習マニュアルや評価シートなどを手作りし、実施に漕ぎ着けました。その頃から、医療面接で東京SP研究会の佐伯晴子氏にお世話になっています。医療面接の授業は、デモやロールプレイが必要ですが、できる教員が誰もおらず、私が約10年担当しました。毎年、学生指導前に教員の研修会も開催しました。平成16年、新カリ4年次生から、臨床実習入門を15ユニット、2カ月に拡大しました。これらが進行する間、9年間、学務委員長を務めました。しかし、私が学内で感謝されたわけではありません。新カリでは多大な人的資源を要し、助手も総動員したため、新カリにかなりの抵抗があり、また、講義減少で不満という教授もいました。ただ、この独自の改革は、後の共用試験や全国の医学教育改革の流れに先んじていて、結果的に本学の面目を保ちました。

大学病院では、平成6年に院内感染対策委員長を引き受け、定年まで20年以上続けました。当時、役に立たないマニュアルがあり、月1回委員会を開くだけでした。しかし、院内感染が社会的に重要視されてきたため、実用的なマニュアルを作成し、ICNを専従化し、「感染管理部」設置に働きました。定年まで感染管理部長を務め、MRSA、耐性緑膿菌、レジオネラ、麻疹、SARS、新型インフルエンザ……と次々に問題や課題が生じて毎週スタッフ会議を開き、さらに病院相互チェックが始まるなど、ほっとする暇のない役目でした。私の最後の仕事は、副部長に専従の准教授(田邊嘉也先生、ICD)を就けてもらい、一応、病院の1部門にできました。

大学でのもう1つの立場は、医学部学士会(有壬会)です。医学科の同窓会ですが、平成6年から約20年間、会計幹事をしました。その後、副

会長、平成26年から会長を務めています。本医学科は110年の歴史があり、7,000人の会員を擁し、全国各地で支部活動もしています。大先輩も多いなか、学士会の運営に取り組んでいます。

皮膚科関連では、まずは新潟地方会会長として県の皮膚科医療の責務が大きな役目でした。ただ、対外的には助教授の頃から東部支部の運営委員や日皮会の委員もしていたので、それほど変わらない思いでした。早くも平成6年に東部支部副支部長、平成10年に同支部長、さらに平成16年に日皮会理事の大役を担いました。理事としては、玉置邦彦理事長、橋本公二理事長の下、皮膚科専門医制度の改革に取り組みしました。また、第108回日皮会総会(京都)の会頭は私や教室にもっとも光栄な出来事でした。総会は皮膚科専門医の教育学会になっていて、4,000人超の参加者があり、専門医制度の「中核」の学会を主催でき、満足しています。私の考えで、各教育講演コースの最後にアンケート(5項目)と試験(5問)を行うone minute sheetを作り、出席や評価に利用するトライアルを行いました。その後の総会でも2回ほどトライアルをしていたきました。たとえば、後実績として5年間に一定数以上のコースを履修すれば、単に「学会出席」で単位を貯めるよりはずっと教育的で、他の学会に先んじると思いました。しかし、医学教育の原理を学会に持ち込むことは時期尚早であったようです。懇親会も私の担当で、おにぎり(魚沼産コシヒカリ)の屋台と村上牛網焼きの屋台は好評で、新潟の銘酒もたくさん並べ、夜遅くまで盛会でした。皮膚科関連では、石橋康正先生(現 東京大学名誉教授)、原田昭太郎先生(元日皮会理事長)や斉藤隆三先生(本学先輩、東邦大学客員教授)など、全国のきわめて多くの先生方と親交いただき、ここで紹介しきれませんが、無事にここまで歩めたのも、皆様のお陰と感謝します。

最後に、教室ですが、助教授(准教授)は順に山本綾子先生、伊藤薫先生、藤原浩先生、下村裕先生が、代々の医局長とともに、滞りなく運営してくれました。新潟県には県立13、厚生連

14, 済生会2, 労災2, 日赤1, 他にいくつかの総合病院があり, 県人口230万人で, 県面積も広く, 大学病院はその中心で, 大学皮膚科の負担はきわめて大です。加えて学生や研修医の教育・指導があり, さらに自らの研究を限られた時間で行わなくてはなりません。それでも, 当時大学院生の風間隆先生, 続いて青木宜明先生が日皮会の皆見賞を受賞してくれました。青木先生の研究テーマは毛ケラチン関連蛋白でしたが, その後, 下村裕先生が研究をいっそう発展させています。下村先生は, 大学院で多くの成果をあげ, 米国Columbia大学Christiano教授の研究室に留学しました。そこでも, 約4年間で毛組織の蛋白や遺伝子, あるいは遺伝性毛髪疾患について卓越した成果をあげ, 米国のgrantを獲得するほどでした。平成22年, 新潟大学が研究者育成のテニユアトラックを設置し, 医学系4名が世界公募されました。それに下村先生が, 数十倍という難関のなか, 臨床医としては唯一採用され, 帰国して本学で自らの研究室(遺伝性皮膚疾患研究室, 特任准教授)を持ちました。ポスドク1名(パキスタン人)と当教室からの大学院生2名のわずかな人員でしたが, 精力的に研究して高レベルの成果を次々に発表し, 5年時限のところ, 厳しい審査にもかかわらず, 4年でクリアしてテニユアに昇任しました。私が教授に就任してから, あまり幸運はないのですが, 多くの優秀な門下生を得て, 皮膚科学教室として誇れる実績を残せたことは第十七の幸運と思います。

V. 付 録

私と同時に大塚藤男先生(現 名誉教授)が筑波大学教授になられ, 以来, 同じ東部支部でもあ

り, とても気の合うお付き合いです。大塚先生にはとくにゴルフを教えていただき, 吉川邦彦先生(現 大阪大学名誉教授)の肝いりで始まった皮膚科教授ゴルフ大会(PDGA)にも皆勤で参加しています。年1回で, 昨年第14回を迎え, 新潟でも第8, 11, 14回大会を開催しました。現メンバーは, 名誉教授が半数で, 若い教授も加わり, 50名ほどです。会長は, 吉川会長→大塚会長→島田眞路会長(現 日皮会理事長)→池田志孝会長と代替わりしています。日本の皮膚科をリードする方々と, 学問を離れて親交を深めることができています。ゴルフの腕前は師匠を超えられませんが, 今後も続けられる限り続けたいと思います。私にとって第十八の(最後の)幸運と思います。

VI. 感 謝

私の歩んだ道には多くの幸運がありましたが, 不運はなかったのでしょうか。いろいろあったかもしれませんが, 私の性格は, それをあまり気にせず, むしろポジティブに捉えてしまうようです。それと, それほど優秀でなくても, 黙々と目の前のことをやっていると, いつか報われると思ってきました。もう1つ, 大切にしたのは人間関係です。これが良好でないと, 不運や不遇はいつでもおこるように思います。信じて裏切られることもあると思いますが, 裏切られるよりは, 裏切ったほうがいずれ信頼を失って損をするものです。われわれの世界では, 個人プレーは成り立ちません。仲間を信頼して, 良いチームワークで歩みましょう。皆さんに感謝します。

